



ものであったが、尚巴志が沖縄を統一したころから、従属的な関係になっていった、と解説していた。薩摩が琉球に侵攻してから、奄美は薩摩の直轄地となり、黒糖生産を強いられて過酷な支配だったらしい。台風で食べ物が無くなった時などは、ソテツを食べて凌いでいたらしい。ソテツは毒抜きをしないと食べられないので、苦しかった生活が想像できる。戦後は一時期米軍統治下であって、短い期間だが、また沖縄と一緒にになっていた時期があったことを再発見した。奄美群島は早く祖国復帰を果たしたのだが、復帰運動の展示にはかなりのスペースが割かれていて意外だった。奄美の復帰運動にも独自の熱い思いや苦しみがあったのだろう。復帰当時の名瀬の様子を残したビデオに写っていたオバー達の頭には、カンブーが結われていた。

午後から大島南部をドライブした。海岸線走るつもりでいてもすぐに山道となり、途中トンネルが多かった。山々が海に切り立っている地形が多いせいなのだろう。ところどころ海岸沿いの小さなスペースに集落があって、昔は隣の村へ行くにも山越えしたり、船を使わなければ行けなかったそうだ。私は以前から奄美大島は沖縄本島の約2/3の大きさがあるのに、なぜ同様な発展をとげなかったのだろう、と不思議に思っていたのだが、このような地形がその答えの一つになるのだろう。そうこう思いを馳

せながらも無事、南の町、古仁屋に着き、対岸の加計呂磨島を見ることができた。ここはフーテンの寅さんの舞台にもなった島だ。大島との間の海峡はリアス式海岸に挟まれてとても趣があったが、目と鼻の先なのに橋が一つも架かっていないことが不思議に思えて、休憩した喫茶店のママさんに「こんなに近くて大きな島なら橋を架けるべきですね」と話したら、「人がいないし、奄美は一度観光に来て二度とは来ないから。」と寂しい返事だった。もっとも補助金漬けで、こんな小さくて人がいない島に、なんでこんな立派な橋？という光景に出会う沖縄の方が異常なのかもしれない。



切り立った海岸線

つづく

(続きは、会報11月号へ掲載致します。)

**原稿募集!**

**随筆のコーナー (2,500字以内)**

随時、募集いたします。日常診療のエピソード、青春の思い出、一枚の写真、趣味などのほか、紀行文、特技、書評など、お気軽に御寄稿下さい。